

## 感情コミュニケーションの社会学と現代社会(3)

内 田 司

---

### 要 旨

現代社会における私たちの生活様式の諸特質の一つは、理性と感情が対立させられ、理性だけが重視され、感情（生活）の重要性が等閑視されてきたということである。というのも、私たちが生活している現代の市場経済社会では、私たちは、最小費用による最大の利潤追求、そのことを可能にする最適化と効率化、そして計算可能性という、近代合理性の経済化された生活原理が至上原理となった社会生活に、否応なしに適応しなければならなかったからである。こうした市場経済社会における経済様式化された社会生活の中では、私たちは否応なく自分以外の外的世界と、自己の私的（経済的）利益を実現するために、損得感情（勘定）にもとづいて、手段的・道具的にかかわらざるをえない。その中では、理性＝知性とされ、私的目的実現の手段として重視されるが、感情はそうした合理的な活動を攪乱する非合理的なやっかいものとして従属的な地位に押し込められてきた。しかし、こうした感情生活を抑圧する社会生活は、諸個人の精神生活だけでなく、対人関係、対社会的関係行為にもさまざまな問題を引き起こしている。連載からなる本稿は、かかる現代社会における諸個人の感情生活の非合理的な存在様式によって引き起こされている、諸個人の精神生活、人間関係、社会との関係にかかわる諸問題を、感情コミュニケーションの視点から分析することを目的としている。本稿の課題は、私たちの日常生活における社会的相互行為のあり方に影響を与えている、現代社会の社会形成原理・生活原理の下で展開されている、人々の感情コミュニケーションの基礎的な型について検討することである。ただし、本号では、共感にもとづくコミュニケーション、損得感情（勘定）のコミュニケーション、そして疑心暗鬼のコミュニケーションについて検討し、傲慢とルサンチマンのコミュニケーションについては、次号で検討することになろう。

キーワード：感情コミュニケーション、共感、損得感情（勘定）、疑心暗鬼のコミュニケーション、傲慢とルサンチマン、愛

### 目 次

#### 序 問題の所在

#### 第一章 社会・生産と生活の社会的諸組織・人間関係・諸個人の精神生活と行動・行為

#### 第二章 理性と感情に関する理論（79号）

#### 第三章 感情コミュニケーションの理論（80号）

#### 第四章 現代社会における生活原理・社会関係原理と感情コミュニケーションの諸類型（本号・未完）

#### 第五章 現代社会の社会変動と社会関係の変容、諸個人の精神生活の諸問題

#### 第1節 現代社会における社会変動と社会類型

- 第2節 現代社会における生活諸領域の分節化と生活諸領域間の関係様式
- 第3節 現代社会における消費の場における生活・社会関係・個人の精神生活
- 第4節 現代社会における労働の場における生活・社会関係・個人の精神生活
- 第5節 現代社会における教育の場における生活・社会関係・個人の精神生活
- 第6節 現代社会における家庭という場における生活・社会関係・個人の精神生活
- 結語 「共感」に基礎をおいた感情コミュニケーションが豊かに発展する社会のあり方を求めて

## 第四章 現代社会における生活原理・社会関係原理と感情コミュニケーションの諸類型

本章では、前章におけるアダム・スミス氏の、一言で言えば「想像上の立場の交換」による他者の感情の共有化という共感にもとづく感情コミュニケーション理論を踏まえつつ、私たちの日常的な社会生活の中で経験する、共感以外の感情交流（感情コミュニケーション）を含めた感情コミュニケーションの主要なあり方を検討することが課題である。その際、私たちが生活している市場経済社会という社会の社会関係原理・生活原理との関わりでその課題を探究していくことになる。そして、それを、市場経済社会における〈社会関係原理・生活原理〉・〈感情コミュニケーションの諸型〉・〈私たちの感情生活のあり方〉の相互関連が、先行する諸学の中でどのように論じられてきたのかを検討することによって果たすことにしたい。

### （共感にもとづく感情コミュニケーション）

まず、近代社会の黎明期、旧社会の変革と新社会形成の原理の旗印として高く掲げられた自由・平等・博愛という理念との関わりで、どのような感情コミュニケーションの型・感情生活のあり方が論じられてきたかについて検討することから始めてみたいのだが、それに先行して、通歴史的な人間の社会的本性にかかわる、人間本来の感情コミュニケーションの型である共感にもとづく感情コミュニケーションが、私たちの感情生活にとってどのような意味をもつものと論じられてきたかについて、再度確認する作業を行っておきたいと思う。

ここでは、その作業のため、アダム・スミス氏の「相互共感の喜び」に関する議論を取り上げてみたい。前章の中で検討してきたように、共感にもとづく感情のコミュニケーションは、人々の間における道徳的諸規則の形成および人々の行為の内面的なコントロールシステムである自我形成の土台として、人間の感情コミュニケーションの最も大事な基本形であった。しかし、スミス氏は、共感にもとづく感情コミュニケーションのそれらだけに止まらない、私たちの日常生活における精神生活にとってもつ重要な意義についても、「相互同感の喜び」に関する議論の中で、次のように論じていた。スミス氏によれば、人間というものは、「同感の原因がなんであろうとも、または、それがどれほどかきたてられようとも、われわれの胸のすべての情動について、他の人びとのなかに同胞感情を観察すること以上にわれわれを喜ばせるもの

はない。またわれわれは、その反対の外観によってうけるほどの衝撃を、けっしてほかにはうけることがないのである」<sup>(1)</sup>。

では、人間は、なにゆえ、そうした共感による感情コミュニケーションに喜びを感じるものなのであろうか。スミス氏によれば、ある人は、人間のもつ自愛心または利己的本性からそれを説明しようとするかもしれない。すなわち、それらの人の「いうところでは、(人々が、共感をえたことに喜びを感じ、反対に共感されないことに苦痛をかんじるのは、)人間はかれ自身の弱さと、他の人びとの援助をかれが必要とすることについて、意識しているので、かれらがかれ自身の諸情念を採用するのを観察すればいつも喜ぶのであって、かれはそのばあいにはそういう援助をうけられるという確信をあたえられるからであり、そして、反対のことを観察すればいつも悲しむのであって、かれはそのばあいにはかれらの反対について確信をあたえられるから」<sup>(2)</sup>〔( )内は引用者による。以下断りがない場合は、( )や傍点などの強調は原文による〕なのである。しかし、スミス氏によれば、共感をめぐる「喜びと苦痛とは、ともに、つねにきわめて瞬間的に、しばしばつまらぬ機会に、感じられるので、そのため、両者のいずれも、なにかそのような利己的な考慮からひきだされうるものではないことが、あきらかなように思われる」<sup>(3)</sup>のである。氏によれば、「人は、同席者の気をまぎらわせようと努力したのち、見まわして、かれ自身のほかはだれもかれの冗談に笑わないことを知ったとき、くやしく思う。反対に、同席者の笑いさざめきは、かれにとって高度に好ましいものであり、かれは、自分の感情にたいするかれらのそのの、この呼応を、最大の喝采とみなすのである」<sup>(4)</sup>。

では、このように主張するスミス氏は、「相互同感の喜び」とはどのようなものと見なしていたのであろうか。スミス氏によれば、それは、氏によって、「仲間」、「友好関係」、「主要な利害関係」というように呼ばれているような関係(本稿では、以下そのような関係を総称して仲間または仲間関係と記述する)にある人々の関係を媒介している愛という感情メディアにたいして人々が感じる快の情動である。スミス氏によれば、人間というものは、愛情による他者とのつながりを求めており、「われわれが、ひとつの本や詩をたびたび読んだために、自分だけでそれを読むことには、もはやなんの楽しみも見出しえないときに、われわれはなお、それを仲間にたいして読むことに、喜びを感じうるのである。かれにとっては、それは、新しいもののもつすべての長所をもっている。われわれは、それが自然にかれのなかにはかきたてるが、もはやわれわれ自身のなかにはかきたてることができない、驚きと驚嘆とにはいりこむ。われわれは、それが提供するすべての観念を、それらがわれわれにとって見えるようにではなく、むしろそれがかれにとって見えるように、考察するのであり、そしてわれわれは、かれの楽しみへの同感によって楽しまれるのであって、こうしてかれの楽しみが、われわれ自身のそれを活気づけるのである」<sup>(5)</sup>。それゆえ、同じくスミス氏によれば、「反対に、かれがそれをおもしろがったように見えないならば、われわれはいら立たざるをえないであろうし、もはや、かれにたいしてそれを読むことに、喜びを感じえない」<sup>(6)</sup>ものなのである。このように、「愛

と歓喜という快適な情念は、なにも付随的な喜びなにしも、心を満足させ支持しうる」<sup>(7)</sup>のものである。

さらに、スミス氏は、そうした共感の喜びから、次ぎのことが観察されるはずであるという。「すなわち、われわれは、自分の快適な情念よりも不快な情念のほうを、いっそう、友人たちに伝達したがるということ、われわれは、後者にたいするかれらの同感からのほうが、前者にたいするそれからよりも、なおいっそうの満足をひきだすということ、そして、それ〔後者への同感〕の欠如によって、他方の欠如によるよりも、なおいっそうの衝撃をうけるということ」<sup>(8)</sup>を。さらにスミス氏はつづける、「不運な人びとは、かれらの悲哀の原因を伝達しうる人物を見つけたときに、どんなにほっとするであろうか。かれの同感によって、かれらは、自分たちの困苦の重荷の一部を、軽減されるように見える。……それでもかれらは、かれらの悲運を物語ることによって、あるていど、自分たちの悲嘆をあらたにする。かれらは自分たちの記憶のなかに、自分たちの苦難をひきおこした諸事情の、回想を目ざめさせる。そこで、かれらの涙はまえより早く流れ、かれらは悲哀のあらゆる弱さに、自己をゆだねがちである。しかしかれらは、このすべてを喜ぶのであって、あきらかに、それによって目立って救われる。なぜなら、かれの同感のここちよさは、この同感をかきたてるためにかれらがこうして活気づけ、あらたにした、悲哀の苦しさを、償ってあまりあるからである。反対に、不運な人びとにたいして与えうるかぎりの、もっとも残酷な侮辱は、かれの災厄を軽視するような外観である。われわれの仲間たちの歓喜に心を動かされないように見えることは、礼儀の欠如にすぎないが、かれらがわれわれにかれらの苦難を語るとき、深刻な顔つきをしないのは、ほんとうの、そしてひどい、不人情である」<sup>(9)</sup>と。

このように、スミス氏によれば、「同感」は、歓喜を活気づけ、悲嘆を軽減する。それは、満足の別の源泉を提示することによって、歓喜を活気づけ、それは、心のなかに、そのときその心が受容しうるほとんど唯一の、快適な感動をしみこませることによって、悲嘆を軽減するのである」<sup>(10)</sup>。さらに言えば、「想像上の立場の交換」による他者の感情のその仲間たちによる共有化という感情コミュニケーションとは、私たち社会的存在である人間の、日常生活における精神生活を、ときにバラ色に彩り、ときに、悲しみや苦しみを和らげることを通して、生き生きとさせ、豊かにし、苦しみや悲嘆の状況の下でもなお生きようとする希望を与えてくれるものなのである。この意味でも、共感にもとづく感情コミュニケーションは、感情コミュニケーションの中の基本中の基本の型といっても過言ではないであろう。

著者は、ここまで検討してきたアダム・スミス氏の「相互共感の喜び」に関する議論は、現代社会で生活している私たちの精神生活を、感情コミュニケーションの社会学の見地から分析しようとするとき、極めて重要な内容を有している議論であると考えている。それは、ただ単に、「相互共感の喜び」が、私たちの精神生活の平穏と安定にとって極めて重要な意味を有しているということ、スミス氏の議論が示しているということだけではない。スミス氏の議論

は、「相互共感の喜び」がなかなか得られないと思われる現代社会に生きている私たちの精神生活は、そのことによってどのような影響を受け、その結果としてどのような形の精神生活上の問題を抱えることになっているかということを探究するという課題を、感情コミュニケーションの社会学に提起するものであるからである。

私たちの生きている現代社会というのは、自己の利益を極大化するという行為動機を解放し、他者との競争の中でそうした利己的動機にもとづく行為を遂行することを大いに奨励もしている市場経済社会、別言すれば自己の利益を追求する自由に最大の価値をおく社会である。すなわち、市場経済社会における自由とは、なによりも自己の利益追求の自由ということを意味しよう。スミス氏によれば、そうした市場経済社会とは、自己の利益の主張を控え、やすやすと他者にゆずってしまうような「やさしすぎる人」は犠牲になる社会なのである。かかる社会の対人関係の特徴は、何と言っても、人々は日常生活の中で他者に自己の弱さや弱音を見せられない、または見せようとしなないというところにあると言えよう。もしかりに、そうした人がいたとしても、それは、少なくともスミス氏の言う、「見知らぬ街頭の見知らぬ人」からは完全に無視されるか、その弱さにつけ込まれて犠牲になるかであろう。また、現代社会では、かなり親しい人になりたいでも自己の弱さや弱音、とくに自己の苦悩や困苦を打ち明けることがなかなか難しい社会でもであろう。それは、そうした場合、親しい人でも自分を、そのことによって傷つけたり、犠牲にされたりすることにたいする心配というのではないが、自分の親しい人に精神的な重荷を与え、何となく人間関係を損ね、最悪の場合には、その人が自分から遠ざかってしまうのではないかという心配はつきないのが、私たちが生活している現代社会というものだからである。こうした社会における精神的に自立した人のモットウは、「弱音をはくな」、「他人に迷惑をかけるな」、「他人に依存するな」、そして「自分一人の力で頑張れ」等であろうか。このような社会環境の下で、私たちの精神生活は、どのような影響を被るのであるか。その課題は次章にゆずり、ここでは、次ぎに、現代社会において優勢な、共感にもとづかない感情コミュニケーションのいくつかの型についての検討を進めることにしよう。

### 〔損得感情（勘定）にもとづく感情コミュニケーション〕

アダム・スミス氏によれば、近代以降の文明社会とは、すべての人が商人になり、商取引という形で他者と関わるという社会関係が、人々の日常生活における対人関係の中で優勢な位置を占めるようになる商業社会（市場経済社会）である。そして、その商業社会における人々の商取引という対人関係・社会関係の基礎となっている感情コミュニケーションこそ、ここで言う損得感情（勘定）にもとづく感情コミュニケーションなのであった。では、その損得感情にもとづく感情コミュニケーションとはどのような性格を有するコミュニケーションなのであるか。

まずアダム・スミス氏自身の定義から見てみると、損得感情にもとづく感情コミュニケー

ションとは、「ある一致した評価（商取引の対象となっているある商品の経済的価値についての評価）にもとづいた、善行（商品）の金銭的な交換」<sup>(11)</sup>〔（ ）内は引用者による〕のことである。この損得感情にもとづく感情コミュニケーションは、相互行為当事者間における「ある一致した評価」にもとづくコミュニケーションであるという点では、共感にもとづくコミュニケーションの一種であると言えるかもしれない。しかし、その「ある一致した評価」というものは喜怒哀楽にかかわる感情の共有化という意味での一致ではなく、自己の利益の極大化を図るという利己的動機からする利害得失の勘定についての一致であるという点で、先に検討してきた感情の共有化という意味での共感にもとづく感情コミュニケーションとはかなり異なった性格を有するコミュニケーションであると言えるであろう。

温かいか、冷たいかという情動のもつ性格の見地で言えば、感情の共有化という意味での共感にもとづく感情コミュニケーションが温かいという性格をもつとするならば、損得感情にもとづく商品の交換行為としてのコミュニケーションとは、冷たいという性格をもつコミュニケーションである。アダム・スミス氏は、そのことを、市場経済社会において人々が例え自己の利益を極大化するという利己的諸動機によってのみ行為するという諸個人だとしても、なおそれらの人々は秩序ある社会を維持することができるということを論じる中で、次のように表現していた。氏いわく、損得感情にもとづく商品の交換関係という社会関係が優越するようになる市場経済社会においては、「必要な援助が、その（愛情や愛着の）ような寛大で利害関心のない諸動機から提供されないにしても、また、その社会のさまざまな成員のあいだに、相互の愛情と愛着がないにしても、その社会は、幸福さと快適さは劣るけれども、必然的に解体するということはないであろう。社会は、さまざまな人びとのあいだで、さまざまな商人のあいだでのように、その効用についての感覚から、相互の愛情または愛着がなくても、存立しうる。そして、そのなかのだれひとりとして、たがいににも責務感を感じないか、たがいに感謝でむすばれていないとしても、それは、ある一致した評価にもとづいた、善行の金銭的な交換によって、いぜんとして維持されうるのである」<sup>(12)</sup>〔（ ）内は引用者による〕と。

さらに、スミス氏は、『道徳感情論』の中で、利己的諸動機にもとづく行為一般がもっている性格について、社会的諸動機と非社会的諸動機にもとづく行為と対比しながら、以下検討するように論じていた。アダム・スミス氏によれば、非社会的諸動機にもとづく行為とは、悪意をもって他者に対し何らかの侵害を行う諸行為のことである。そして、それらの行為は、「憎悪と憤慨、およびそれらのさまざまな変容のすべて」<sup>(13)</sup>の情念を、私たちの精神生活の中に呼び起こす。さらに、同じくスミス氏によれば、「これらの情念は、人間本性の性格の、必要な部分とみなされている」<sup>(14)</sup>ものであり、他者から言われ無き侮辱を受けたときなど、「意気地なく静かに座って、侮辱に甘んじ、それに抵抗または復讐しようと企てることのない人物は、軽蔑すべきものとなる」<sup>(15)</sup>のである。そうした場合、「われわれは、かれの無関心と感受性のなさに、はいりこむことはできない。われわれはかれの態度を、卑劣とよび、かれの敵の傲慢

によってとおなじく、それによってほんとうに、怒りを挑発される」<sup>(16)</sup>ものなのである。

これらの非社会的動機にもとづく行為と全く反対の性格をもつ行為が、スミス氏によれば、社会的諸動機、すなわち愛という感情にもとづく行為なのである。社会的諸動機にもとづく諸行為とは、「倍加された同感がそれをほとんどつねに、とくに快適で適切なものとする」<sup>(17)</sup>であろうような諸行為のことである。「寛大、人間愛、親切、同情、相互の友情と尊敬、すべての社会的で慈愛的な意向は、顔つきあるいは態度に表現されるときには、われわれに特別の関係がある人びとにたいしてであっても、ほとんどどんなばあいにも、利害関係のない観察者を喜ばせる。それらの情念を感じる人へのかれの同感、それらの情念の対象である人へのかれの関心と、正確に一致する。この後者の幸福について、かれが人間としてもたざるをえない関心が、他方の人の諸感情にたいするかれの同胞感情を、活気づけるのであって、その人の諸情動は、同一の対象についやされているのである。したがって、われわれはつねに、慈愛的な諸意向に、同感したいというもっとも強い気持ちをもつ。それらは、どの点においても、われわれにとって快適であるように思われる。われわれは、それらを感じている人と、それらの対象である人との、双方の満足にはいりこむ」<sup>(18)</sup>のである。

かかる社会的諸動機にもとづく諸行為に関する議論の中で、スミス氏が、とくに家族を例にとりあげて、次のように論じていることは興味深い。その議論は、後に現代日本の家族生活を分析する参照になると思われるので、ここで煩を厭わず全文引用しておきたいと思う。氏いわく、「愛の感情は、それ自体として、それを感じる人にとって快適である。それは胸をなだめやわらげるし、生命の運動を助けて人体構造の健康な状態を促進するように見える。そしてそれは、その対象である人のなかにそれがかきたてるにちがいない感謝と満足の意識によって、さらにいっそう喜ばしいものたらしめられるのである。かれらの相互的な顧慮が、かれらの双方をたがいに幸福にしあい、この相互顧慮にたいする同感が、かれらを、他のすべての人にたいして快適なものとする。なんという喜びをもって、われわれはつぎのような一家族をみることであろうか。すなわち、その家族の全体にわたって、相互の愛情と尊敬が支配し、その〔家族〕のなかでは、両親と子どもたちが、相互に仲間であって、一方における尊敬にみちた愛着と、他方における思いやりのある甘やかしのほかには、なんのちがいもなく、そこにおいて、自由と愛好、相互の冗談、相互の親切が示すのは、どんな利害関心の対立が兄弟を分かつこともなく、愛顧を求めるとどんな競争が姉妹を仲違いさせることもないということであり、そして、そこではあらゆるものが、平和、快活、調和、満足の観念を、われわれに提供するという、そういう家族である。反対に、われわれがつぎのような家にはいるとき、なんと不安にさせられることだろうか。すなわち、その家では、いら立たしい争いが、そのなかに住む人びとの半分を、他の半分に対立させているのであり、そこでは、わざとらしいおだやかさと愛想のよさとのただなかで、疑いぶかい目つきと情念の突発とが、かれらのなかに燃えていて、どの瞬間にでもただちに、同席者の存在が課しているすべての抑制をつきやぶって爆発しそうな、相互の

嫉妬を、暴露する」<sup>(19)</sup>（下線による強調は引用者による）という、そういう家族であると。

上で見てきた非社会的動機にもとづく行為と社会的動機にもとづく行為にかかわる諸情念のほかに、スミス氏によれば、もう一つの種類の行為動機にもとづく行為にかかわる諸情念があるという。スミス氏自身のことばで言うならば、上で見てきたような「このふたつの対立する組の社会的および非社会的な諸情念のほかに、もうひとつ、両者のあいだに一種の中間的な地位をしめる組があって、それはけっして、一方の組がときどきそうであるほどには上品でなく、しかもけっして、他方の組がときどきそうであるほどにはいやらしくない。われわれ自身の私的な運不運を理由として、いだかれる悲哀と歓喜が、この第三の諸情念を構成する」<sup>(20)</sup>のである。スミス氏によれば、これらの諸情念は「利己的な諸情念」と命名できうるものなのである。利己的諸動機にもとづく諸行為とそれに伴うさまざまな諸情念は、この第三組の中立的な諸情念の組に入るものであり、市場経済社会の市民社会における商取引という諸行為もこれらの諸情念の組の中の一つの情念に基づくものということになる。

この「利己的な諸情念」<sup>(21)</sup>にかかわる共感の成立については、次のような特質があるとスミス氏は論じている。ひとつは、愛情というような社会的諸情念にかかわる共感と比べて、快不快という点から言うと、快適ではないということである。氏いわく、「利己的な諸情念」は、「人間愛および正当な慈愛のように、快適ではないのであり、なぜならば、（行為当事者の諸情念と行為当事者の行為の対象となっている人または人々の諸情念への）二重の同感がわれわれにそれらを支持する関心をもたせるということは、けっしてありえないからである」<sup>(22)</sup>〔（ ）内は引用者による〕と。しかも、「利己的な諸情念」について共感が成立するためには、とくに幸運に恵まれた人は、自己の喜びの感情をかなり低くおさえる自己規制の努力が求められるのである。それが、「利己的な諸情念」をめぐる共感についての第二の特質である。

スミス氏が、この特質をめぐる取り上げる例は、幸運に恵まれ高い経済生活や社会的地位をえることができた人の喜びという感情である。スミス氏いわく、「運命のある急激な回転によって、かれがまえに暮らしていたよりもずっと高い生活状態に、まったくとつぜんに引き上げられた人は、かれのもっとも親しい友人たちの祝辞でさえも、その全部が完全に誠意あるものではないと、確信してさしつかえない。成りあがり、最大の功績をもっている、一般に不快であり、そして、羨望の感情が、かれの歓喜に心からわれわれが同感するのを、阻止するのがふつうである。もしかれがいくらかでも判断力をもっていれば、かれはこのことに気づくのであり、そして、自分の幸運によって得意になっているように見えるのではなく、自分の歓喜をしずめ、かれの新しい環境がとうぜんかれにふきこむ精神の高揚をおさえるように、かれとしてできるかぎり努力するのである。かれは、まえの地位にあったときの自分に似合わしかったのと、おなじく簡素な衣服、同じく謙虚な態度を、好んで身につける。かれは、自分の旧友たちにたいする配慮を倍加するし、そして、まえよりいっそうの努力をして、へりくだり、心をくばり、丁寧であろうとする。かれの境遇においてわれわれがもっとも是認する態度は、こ

れなので」<sup>(23)</sup> であると。

以上のスミス氏の議論は、前章で検討してきたスミス氏の共感に関する理論は、如何に利己的諸動機にもとづいた諸行為とそれらの諸行為に伴う諸感情を念頭において展開されているものであるのかを、私たちに、あらためて思い起こさせてくれるものであろう。とくに、自己の経済的利益の極大化を動機として自分たちの商品を交換し合う商取引という行為は、私たちの精神生活の世界をして、損得感情の生活世界から究極的には損得勘定の世界という人間の感情そのものを全く排除した生活世界への展開を必然化する行為であるということが、理論的にも、実際的にも言えるのではないだろうか。それは、私たちのコミュニケーションという視点で言えば、「見知らぬ街頭の見知らぬ人」とのコミュニケーションを可能にし、見たことも会ったこともない世界中の人との間のコミュニケーションを可能にする道を切り開いてくれているのかもしれない。しかし、それは、他方で、私たちの感情コミュニケーションと感情生活という視点から見ると、心豊かな感情コミュニケーションと感情生活は痩せ細り、枯れ果て、消え去って行くようなコミュニケーション環境である。

商取引という社会関係は、究極的には、損得勘定を土台としている、「ある一致した評価にもとづいた、善行の金銭的な交換」のことであり、それは、取引相手の幸不幸に何らの関心をもたない、そして時間論的には、瞬間的な人間関係である。そうした生活世界の中では、自己の利益の観点から取引という関係に入る以外のときは、例えそうした諸個人が近接した同じ生活空間に一緒に存在していたとしても、これも究極的には、他者の存在それ自身さえ気にかけない、相互無関心という人間関係の世界が限りなく増大していくことも考えられる。また、他者に関心をもつ場合でも、それは行為当事者にとって自己の利益になるかぎりにおいてであり、その際の他者認知の原理は、自己の利益の実現の手段として、道具として関心をもつというものであろう。そのように、全く他者との感情交流をなくしてしまった社会の生活世界は、私たちの精神生活、とくに感情生活にどのような影響を及ぼすことになるのであろうか。

そこまでいかなくても、現代の日本社会でも、自他の自由を自分の都合や気持ちによって縛ることを最大限避けるということに大きな価値をおき、それゆえ、かなり親しい間柄であっても、相手の気持ちに介入しないということを心がけるというマナーこそが、よしとされる生活態度が広く浸透するようになってきているという。そうした規範を内面化した人は、そうした生活態度を、「やさしさ」と捉えているともいわれている。『やさしさの精神病理』を著わした大平健氏によれば、「旧来の『やさしさ』とは、相手の気持ちを察し共感することで、お互いの関係を滑らかなものにすることでした。『やさしい』気持ちになればそれだけでも『やさしい』関係が可能だったのです」<sup>(24)</sup>。「一方、新しい、“やさしさ”では、相手の気持ちに立ち入ることはタブーです。相手の気持ちを詮索しないことが、滑らかな関係を保つのに欠かせません」<sup>(25)</sup>というのである。さらに、大平氏は、新しいやさしさについて、次のように論じる。「新しい“やさしさ”を理解するためには、旧来の『やさしさ』をいったんは棚上げにしなければ

なりません。同じ言葉を用いながら二つのやさしさは、それほど異なっているのです。小遣いをもらってあげる“やさしさ”，好きでなくても結婚してあげる“やさしさ”—新しい“やさしさ”とはそのように具体的で実践可能なことです。単なる『気持』といった漠然としたものではありません。それどころか，言葉で『気持』を伝えたり伝えられたりすることは御法度でさえあるのです。とにかく『気持』偏重だった古い『やさしさ』にこだわっているのは理解できない<sup>(26)</sup>，そういうのが新しいやさしさなのです。

以上のような大平氏がいう新しいやさしさとは，感情コミュニケーションの視点から見れば，対人関係において心理的摩擦・葛藤を回避することによって滑らかな人間関係を築こうとする内的態度と言うことができようか。本来，相互信頼にもとづく強く，それでいて滑らかな絆＝やさしさという感情メディアによって媒介された人間関係は，ときには厳しい心的摩擦・葛藤をたびたび経験する，長期にわたる相互行為関係の中で，徐々に形成されて来るものと考えられるのであるが，現代的やさしさを求める人たちは，まさにそうした心的摩擦・葛藤の経験を節約（エコノミー）し，省略することで，滑らかな人間関係を効率よく，手取り早くえようとしているようにも見える。また，現代社会では，なかなか，滑らかな人間関係，自分を受け入れてもらえる人間関係をえることができないために，自己の諸感情や諸意向を抑制，または抑圧することで相手に受け入れてもらえる人間関係を維持しようと汲々としているようにも見える。いずれにしても，大平氏が言う，新しいやさしさには，何とか良好な対人関係を築くことに固執しなければならない現代人の姿が映し出されていると言えよう。しかし，そのようにしてえた人間関係の中で，ときには，「精神的病理」を抱えるようになってしまうのも，現代人の姿<sup>(27)</sup>に他ならないのである。

損得感情にもとづくコミュニケーションが普遍化しているという社会状態の下でも，人々が共同的・協同的諸関係に入るということが，原理的にもなくなるわけではないであろう。なぜならば，自己の利益をより多くするために共同的・協同的諸関係を結ぶという行為は，自己の利益の極大化という行為動機と論理的に矛盾するものではないからである。しかし，そうした人々の共同的・協同的諸関係とは，一方では，それらの関係者たちは，絶えず仲間の裏切りの発生の心配をし，または仲間の裏切りに注意を向けていなければならないような諸関係なのである。なぜなら，それらの共同的・協同的諸関係はあくまでそれらの諸関係への参加者が自分たちの利益があがるかぎりで維持されている諸関係であり，それが維持されないか，または仲間を裏切ったときのほうがより利益が手に入るというような場合には，それらの諸関係の中で容易に裏切り行為が起こりえるからである。前近代社会の「村落共同体」のような，何世代もこえて固定したメンバー，言葉を換えて言えばその社会からの移動の自由がかなり制限されているようなメンバー，それゆえ，氏素性だけでなく，お互いの人間性や性格まで熟知し合った人たちによって，互惠的・互助的に維持され，心情的にもかなりの信頼関係が蓄積されてきているような，そしてそれゆえかりに裏切り行為を行った場合には，その一度の裏切りによる制

裁によってその後かなりの長期にわたって不利益を被らなければならないことを覚悟しなければならないような共同的・協同的諸関係とは違って、市場経済社会における、基本的に匿名の任意の人々の間での合意または契約にもとづく、短期の利益があがるかぎりでの共同的・協同的諸関係において、しかも基本的には自他関係においてかなり強い競争主義的原理が作用するという性質を有している社会的条件の下では、なおさら、何らかの裏切り行為の発生する確率は格段に高くなることは容易に予想することができよう。こうした諸関係の中にある人々での感情コミュニケーションこそが、疑心暗鬼のコミュニケーションなのである。そこで、次にその疑心暗鬼のコミュニケーションとはどのようなコミュニケーションなのかについて見ていくことにしよう。

### (疑心暗鬼の感情コミュニケーション)

ここで言う、疑心暗鬼の感情コミュニケーションとは、損得感情ないしは利己的な諸動機にもとづく相互行為関係において、利益があがる限りで、共同・協力的、または親密な諸関係を結んではいるが、一方では、絶えず相手の裏切りの可能性が伏在している共同・協力の、または親密な諸関係を結んでいる人々との感情コミュニケーションのことである。この疑心暗鬼の感情コミュニケーションの理論モデルとしては、社会的ジレンマ研究における「囚人のジレンマ」をあげることができるであろう。この「囚人のジレンマ」は、共同し、協力して犯した犯罪で逮捕された二人の囚人が、逮捕後の取り調べの中で、その過程の中でもお互いに協力し、犯罪行為を行ってしまったことを否定しつづければ刑期が軽くなるが、どちらか一方か、またはお互いが相手を裏切り、犯罪に手を染めたことを自白した場合は、両者の裏切りの場合は両者とも、そして、一人だけの裏切りの場合は裏切られた方の容疑者の刑期が重くなるが、しかし、裏切った容疑者の罪は免罪されるという条件の下で、相手と協力するか、それとも裏切るかの心的葛藤を抱える中で、決断のしなければならないという、ジレンマのことである。

このゲーム理論における「囚人のジレンマ」の研究は、一般的には、利己的な諸個人の間ににおける協力関係の進化過程に関し、1回限りのゲームではなく、繰り返し行われるゲームという条件の下での研究として行われるものなのであるが、ここでは、その、とくに1回限りのゲームにおけるプレイヤー(囚人)たち相互の心の中で引き起こされる心的葛藤の特徴を、「疑心暗鬼」という用語によって表現している。進化論を基礎とする心理学によれば、人間の進化過程の中で形成されてきた社会環境への適応的感情システムである心のモジュールは、「進化的適応環境においてヒトが遭遇した問題を解決するため、自然淘汰によって形成されてきた」<sup>(28)</sup>もので、その不可欠なメカニズムの一つに、仲間関係にあるメンバー間における「欺きの検出」というものがあるという<sup>(29)</sup>。まさしく、疑心暗鬼という心的状況は、私たちの社会生活における感情生活および感情コミュニケーションの中の基本形の一つと言えるのではなかろうか。では、「囚人のジレンマ」とは、より具体的に示せば、どのようなものなのであ

うか。これについては、すでにすぐれた先行の諸研究が多くだされているので、その専門でもない著者がこれ以上屋上屋を重ねる必要はないであろう。そこで、ここでは、山岸俊男氏の「囚人のジレンマ」についての論述を引用させていただくことにしたい。山岸氏は、「囚人のジレンマ」について、わかりやすく、次のように論述していた。

山岸氏いわく、『『囚人のジレンマ』という言葉は、二者間の社会的ジレンマの構造を説明するために、重大な犯罪の容疑で逮捕された二人の容疑者（＝囚人）の間の次のような関係を例として用いたことから、ゲーム理論家達の間で広く用いられ始め、それが今では心理学や社会心理学、あるいは社会学、経済学、政治学等、社会科学の様々な分野で用いられるようになっています。

まず、囚人のジレンマという言葉のもとになった、二人の容疑者の例について説明しましょう。

ある重大な犯罪の容疑者としてAとBの二人が別件逮捕されましたが、警察ではまだ十分な証拠がなく、どうしても容疑者の自白を必要としています。自白がなければ犯行を立証することが難しく、その場合には別件で比較的軽い罰を受けるだけですむでしょう。

そこで取調べにあたった検事は二人を別々に尋問し、次のような提案をします。

『お前たちがヤッタことはわかってるんだ。早く吐いちなよ。どうだい、ものは相談だが、もしお前の相棒がシラを切り続けている間にお前が自白してくれれば、情状酌量ということでお前は不起訴処分ということにしてやろうじゃないか。

だけど反対に、もしお前の相棒が自白しちまったのにお前がシラを切り続けるってことになれば、情状を考慮する余地は全くなしってことで、まあ無期懲役は免れないだろうよ。

二人とも大人しく自白すれば、二人とも不起訴ってわけには行かないけど、まあ情状酌量の余地ありってことで、十年ぐらいですむようにしてやろうじゃないか。

もっとも二人ともシラを切り続けければ残念ながら別件で起訴するより他はないだろう。そうになったら二人とも一年ぐらいしかブチ込んでやれないが。』

この話は、そもそもアメリカでの裁判制度を前提としており、日本では実際に容疑者との間でこのような交渉をするわけには行かないのですが、アメリカには予審制度というものがあって、捜査に協力することを条件に起訴猶予にすることが実際よくあります。

ともかく、実際に二人の容疑者に対してこのような提案がなされたとします。その場合、この二人の容疑者の間には……、ドゥズによる社会的ジレンマの定義にあてはまる関係が存在しています。

- ① それぞれの容疑者は自白するかしないかの選択を行います。この二人にとっては自白しないことが『協力』であり、自白することが『非協力』となります。
- ② それぞれの容疑者にとっては、相手が自白するかどうかにかかわらず、自分が自白する（『非協力』を選択する）方が、自白しない（『協力』を選択する）よりも、より多くの利益を

得る（つまりより少ない罰を受ける）ことができます。

たとえば相手が自白しない（『協力』を選択した）場合を考えて見ましょう。この場合、自分が自白すれば不起訴となり、自白しなければ一年の懲役となります。したがって自白した方が得なわけです。

これに対して、相手が自白をした（『非協力』を選択した）場合はどうでしょうか。この場合には、自分が自白すれば十年の刑、自白しなければ無期懲役になり、やっぱり自白した方が得になります。

③ しかし二人とも自白した（『非協力』を選択した）場合には二人とも十年の刑となるのに対して、二人とも自白しなければ（『協力』を選択すれば）二人とも一年の刑ですむわけですから、全員協力の場合の利益の方が全員非協力よりも大きくなります。

このように人間にとっては『非協力』の方が『協力』よりも有利な結果をもたらすと同時に、二人ともが自分にとってより有利な『非協力』を選択すれば、結局は双方にとって望ましくない結果が生まれることになります。

この二人の間の関係は、通常次のような表であらわされています。この表は、それぞれが『協力』と『非協力』のいずれを選択したかの組合せに応じて、それぞれが得る結果を示しているわけで、これらの結果はそれぞれの人間にとっての利益を示しているわけですから、この表は通常『利得行列』とよばれています<sup>(30)</sup>と。

以上のような山岸氏の「囚人のジレンマ」の説明における「協力」を（相手に対する）信頼、そして「非協力」を（相手に対する不審、それゆえの）裏切りと読み替えるならば、まさしく「囚人のジレンマ」の中におかれている囚人Aと囚人Bの間で取り交わされている感情とは、疑心暗鬼という有り様を、典型的な形で示しているであろう。共同と協力関係にあるメンバー相互における疑心暗鬼の感情コミュニケーションとは、同じ社会のメンバー間における相互信頼にかかわる感情コミュニケーションのことと言い換えることができよう。では、市場経済社会という生活環境の中で生活している私たちは、「囚人のジレンマ」というような特殊な環境ではない生活空間で日常生活をおくっているのであるが、生活空間をともにしている他者に対して、どれくらい信頼をおいて生活しているものなのだろうか。ここでは、その点について、とりあえず理論的に把握することに努めてみよう。

これまでも参照してきたアダム・スミス氏によれば、市場経済社会も、ある意味で人々の「共同社会」である。スミス氏によれば、人間の本性は社会的存在であるということにあり、その特質は、他の動物には見られない「取引し、交易し、交換するという一般的性向」<sup>(31)</sup>なのである。この特質のおかげで人間は、諸個人間にある才能・能力の違いを一つの共同の財産にたくわえ、それぞれの生活改善のために役立てることができるのであった。このように、スミス氏によれば、市場とは、人々の生活改善のための共同財産に他ならず、それゆえ、市場経済社会とは、そうした共同財産を基礎とした、貨幣と商品語というコミュニケーションメディア

による、社会のメンバー個々人の諸能力・諸力能の交換システムという意味での共同社会に他ならなかったのである。

しかも、同じくスミス氏によれば、市場経済社会における生産は、生産者自身の欲求を充足するために行われるのではなく、市場でそれを購入してくれる購買者の欲求を充足するための商品を生産するという特質をもっているのである。それゆえ、分業と分業にもとづく商品交換による共同社会である市場経済社会では、そのメンバー個々人は、他の動物と同じように、自己の利益を第一義的に考え、その利益の極大化のために行動している利己的存在であるとしても、先に述べた商品生産に内在している論理からいって、私は他

人に順応しなければならない、別言すれば、他人の欲求や本性を配慮し、それらに従って行動しなければならないのである。ヘーゲル氏は、自己の利益をあげたいという欲求を満足させるためには、私が他人の生活改善の欲求を満足させなければならない、すなわち他人に順応しなければならないという、そうした市場経済社会の内在論理は、社会のメンバーたちの社会的欲求を増大させ、自己中心的性質を陶冶し、解放していくとまで論じていたのである。ヘーゲル氏自身のことばで言えば、市場経済社会の「この社会的契機のなかには、(人間のもっている自己中心性という)自然必然性からの解放の面がある。すなわち欲求の厳しい自然必然性は隠されて目立たなくなり、人間はおのれの意見、そのうえ社会一般の普遍的意見、つまり人間みずからが作ったにすぎない必然性に従ってふるまい、たんに外面的偶然性や、内的偶然性である恣意に従ってふるまうのではないという面」<sup>(32)</sup>〔( )内は引用者による〕が際立ってくるのであるというのである。

ヘーゲル氏はそう言うのではあるが、しかし、氏が言うことが当てはまるのは、損得勘定にもとづく商品生産の、人間の知性理性の側面についてのことではあっても、市場経済社会で生活している人々の感情の側面については、当てはまらないといわざるをえないのではなかろうか。というのも、感情の理性性にかかわる、アダム・スミス氏の言う社会的性質を有した諸感情、すなわち愛情や仁愛という感情の交流とそれらの交流による強い相互信頼という絆は、市場経済社会の中で生活する人々の間では、やはり市場経済社会のもっている原理から言っても、なかなか築くことは困難であると考えられるからである。確かに、市場経済社会においては、自己の欲求の満足が他者の欲求を満足させることにかかっているという社会形成原理が存在する。しかし、ここでも、他者の欲求を満たすのは、決して、自己が他者のいいなりになるためでも、他者のことを思ってそうするのでもなく、最終的には、そのことを通して、抜け目なく、

		Aにとっての利得	
		自白しない	自白する
Bにとっての利得	自白しない	1年 1年	不起訴 無期
	自白する	無期 不起訴	10年 10年

表1 囚人のジレンマの利得行列の例

それぞれの枠目の右上はAにとっての利得、左下はBにとっての利得を表す。

山岸俊男、前掲書より引用

自己の欲求や利益を実現することこそが目的なのである。

スミス氏いわく、市場経済社会では、「人間は、ほとんどつねにその同胞の助力を必要としていながら、しかもそれを同胞の仁愛 (benevolence) だけに期待しても徒労である。そうするよりも、もしかれば、自分の有利になるように同胞の自愛心 (self-love) を刺激することができ、しかもかれが同胞がもめていることをかれのためにするのが同胞自身にも利益になるのだ、ということを示してやることができるならば、このほうがいっそう奏功するみこみが多い。およそどのような人でも、他人にある種の取引を申しでるばあいには、こういうことをしようと提案するものである。わたしのほしいものをください、そうすればあなたのほしいものをあげましょう、というのがこのような申しでのあらゆるばあいの意味なのであって、こういうふうにしてこそ、われわれは、自分たちが必要とする世話のはるか大部分のものをたがいうけとりあうのである。われわれが自分たちの食事を期待するのは、肉屋や酒屋やパン屋の仁愛にではなく、かれら自身の利益に対するかれらの顧慮に期待してのことなのである。われわれはかれらの人類愛にではなく、その自愛心に話しかけ、しかも、かれらにわれわれ自身の必要を語るのではけっしてなく、かれらの利益を語ってやるのである。主として市民同友たちの仁愛にたよろうなどとする」<sup>(33)</sup>人は、この世に一人としていないのであると。アダム・スミス氏は、このような関係を冷たい交換、すなわちコミュニケーション関係と性格づけていた。

すでに指摘したことではあるが、商品の交換関係において、自己の仁愛の精神を発揮しようとして、単に、他者のいいなりになるだけの、いわゆるやさしい人は、他者の裏切り（価値以下の商品をわたす、または反対に商品を受け取ってお金を払わない等のような）により犠牲になる社会、それがスミス氏のいう市場経済社会なのである。自己の利益を損なわないように、商品交換関係においては、他者を注視し、自己の利益を主張しなければならないのである。その関係は、確にお金を払えばその価値に見合った商品、またはサービスを受け取れるという意味での信頼を土台としている関係ではある。しかし、その信頼関係は、自己の利益が相手との関係において損なわれないよう、相手に気を許すことなく、つねに緊張感をもって自己の利益を確保するための努力があつてはじめて維持されるというような性質をもっているものなのである。匿名の他者との、しかも、一瞬の関係であればなおさらそうした性格は、強くならざるをえないであろう。共同し、協力することによる利益のために共同的・協同的諸関係を結んでいる生産者たちの間の関係においても、市場経済社会においては、生産者と購買者との商品交換の関係に内在する「疑心暗鬼」的な感情コミュニケーションをもたざるをえないであろう。日本的な表現で言えば、生き馬の目を抜くような社会、それが市場経済社会に他ならないのである。私たちの日常生活の中で、そのような「疑心暗鬼」の感情コミュニケーションが浸透してくるようになってとき、私たちの人間関係と私たちの精神生活はどのような影響を受けることになるのであろうか。

また、そのことについては、ここでは全く論じることができないことではあるが、損得勘定

と疑心暗鬼の感情コミュニケーションの優越する社会の中では、確実に、諸個人は、自己の存在価値やそうした社会で生きる意味についての実感を、日々の生活の中での精神生活において、喪失しかねない危機をむかえる可能性にたえずさらされているという問題が存在しているのである。なぜならば、そうした感情コミュニケーションが優越する社会とは、そうした社会における社会関係が相互手段の関係であり、それゆえ他者に対し自分が有用であるか、利益を与えることができる存在であることを示すことができ、はじめて他者からの関心や承認をえることができるような社会であるからである。そのことができないか、示すことに失敗してしまった諸個人は、他者から関心をむけられることもなく、見向きもされないで、存在はしていても、事実上社会から排除されているような境遇を余儀なくされるということがありえるからである。そうした境遇におかれた個人の精神生活とはどのような状況になるのであろうか。

人間の本性とは社会を欲するということにある見るヒューム氏は、この点に関わって次のような議論をしていた。「けだし人間は、宇宙の生物のうちで社会を造る最も熱烈な欲望を有するものであり、また社会によって最も多くの利益を得るところからそれに適したものなのである。我々人間は、社会との関係のないいかなる願望も抱くことができない。完全な孤独は恐らく我々の受け得る最大の罰である。すべての快は、仲間から離れて享受するとき萎え、すべての苦は残忍と耐え難さとを増す。自負、野心、貧欲、好奇、遺恨、色欲、どんな他の情緒によって湧立たせられようとも、それら他のすべての情緒の魂すなわちそれらの情緒に生命を吹き込む原理は、共感である。換言すれば、我々が他人の思想や心持ちを全く度外視しようとするとき、それら一切の情緒は勢を失うのである」<sup>(34)</sup>と。

また、ジョン・ロック氏も、自分が所属する社会の他のメンバーから無視され、非難されるなかで、平気でいられる人というものは、この世には、ただの一人もいないということを強調していた。ロック氏いわく、「自分自身の団体に絶えず嫌忌され難詰されても耐え抜くほど強情で無感覚な者は、一万人に一人もいない。絶えまない不評・悪評判の中で自分自身の属する特定社会とともに安んじて生きられる者は、ふしぎな異常体質の者に違いない。なるほど、孤独を多くの人は求めてきたし、それと融和してきた。が、周囲の一人の人間のことをすこしでも考えたり感じたりする者はだれでも、親しい者や交わる者に絶えず嫌忌され悪く言われながら社会に生きることはできない」<sup>(35)</sup>と。

疑心暗鬼の感情コミュニケーションの検討の最後に、市場経済社会では、これまで見てきたように、一般的にいても、損得勘定と疑心暗鬼の感情コミュニケーションが普遍化するのであるが、さらにその上、その歴史的な展開の中で、あまりにも個々人の自己の利益追求的な諸行為が際立ってきて、他者の不幸や悲惨な生活に誰も関心をもたず、放置されるような社会状態が生じるようになると、それは、その社会のモラル秩序形成の土台そのものを浸蝕し、崩壊させてしまうということについて言及しておかなければならないであろう。なぜならば、ある社会の中でモラル秩序が形成されるためには、その社会のメンバーの間に、私たちは同じ社会

または集団に属している仲間であるという意識や感情、スミス氏のことばによれば「同胞感情」、ヴィンセント・ホープ氏のことばによれば「我々意識（主義）」というしっかりとした土台が必要とされるからである。先に引用した進化心理学者のジョン・H・カートライト氏によれば、私たち人間の、長い人類の進化過程の中で形成されてきた心という道具、または心のモジュールのなかに、「血縁者と非血縁者の認知」や「自分の集団とよその集団の認知」が、基礎的に重要なものとして含まれているのである<sup>(36)</sup>。この進化心理学の見地から見ても、ある社会の中でモラル秩序が形成されるためには、そのメンバーの間で、その社会は自分たちの社会である、またはわれわれの社会であるというアイデンティティが共有されているということが、必要条件であると言えよう。

しかも、この「同胞感情」や「我々意識（主義）」は、ただ単に同じ社会、同じ生活空間で生活していれば、自動的にそれらの生活者たちの中に形成されていくというようなものではないのである。自己利害を最優先する諸個人の相互行為が浸透している市場経済社会の中で、人々は果たして自己利害をこえた、私たちの日常生活における支え支えられる協同的な社会諸関係を築くことができるかどうかの原理的探究を行う中で、ヴィンセント・ホープ氏は、モラル秩序形成が可能となるような人間的な社会関係の根底には、ただ単に同じ社会に属しているということだけでなく、共に働き、共に生活し、時には協力・協同（協働）しながら、さらにそれらの過程での相互の意思や情報を交換するという意味でのコミュニケーションを行うということをはるかに超えて、メンバー内の相手にたいする関心、気づかい・配慮、そしてまさかの時のお世話の相互交換というコミュニケーションが存在していることの重要性を指摘していた<sup>(37)</sup>。ホープ氏によれば、人間には、そうしたコミュニケーションを可能にする社会性が備わっているものであり、その社会性は、ある社会ないし社会集団内において、メンバーたちが長期に渡る配慮ある相互共感によって築かれた相互の信頼や気づかいの交換というコミュニケーションを通して発揮され、発達させていくことができるものなのである。市場経済社会に優越している、瞬間的で、しかも自己の利益の実現以外に他者への関心をもたない、「ある一致した評価にもとづいた、善行（商品）の金銭的な交換」というコミュニケーションでは、そうした社会性は発達しないであろう。また、そうした社会性が発達しているという土台があって、はじめて、モラル秩序は形成される。そして、モラル秩序があって、はじめて、諸個人は、モラル心をもつことができる。現在よく言われている日本社会におけるモラルの崩壊は、感情コミュニケーションの視点からみれば、それは決して個々人のモラル心の欠如ではなく、日本社会内におけるモラル秩序の欠如なのである。モラル秩序なきところで、社会的存在である個人は、原理的には、モラル心をもち、モラル的に振る舞うことはできないのである。

#### 註

(1) アダム・スミス『道徳感情論』水田洋訳、筑摩書房、1973年、14頁。

(2) 同上、14～15。

- (3) 同上, 15頁。
- (4) 同上。
- (5) 同上。
- (6) 同上。
- (7) 同上, 17頁。
- (8) 同上, 16頁。
- (9) 同上, 16～17頁。
- (10) 同上, 16頁。
- (11) アダム・スミス『諸国民の富Ⅰ, Ⅱ』大内兵衛・松川七郎訳, 1969年, 81頁。
- (12) 同上。
- (13) アダム・スミス, 前掲書『道徳感情論』, 46～47頁。
- (14) 同上, 47頁。
- (15) 同上, 47～48頁。
- (16) 同上, 48頁。
- (17) 同上, 54頁。
- (18) 同上。
- (19) 同上, 55頁。
- (20) 同上, 57頁。
- (21) 同上。
- (22) 同上。
- (23) 同上, 57～58頁。
- (24) 大平健『やさしさの精神病理』岩波新書, 1996年(8刷), 81頁。
- (25) 同上。
- (26) 同上, 164頁。
- (27) 「ひきこもり」や「ニート」などの社会問題の当事者となっている現代日本の若者たちは, 一般的には, 以前の若者たちと比較しても, コミュニケーション能力が低下したと言われている。しかし, 一方では, 見知らぬ人たちともものおじせず, どうどうとコミュニケーションを行うことにたけているのが現代日本の若者たちの姿であり, 以前と比べてもコミュニケーション能力は格段に上がっているという議論もある。その議論に関しては, 中村恭子・原田曜平『10代のぜんぶ』ポプラ社, 2005年を参照してほしい。ただ, ここから, 現代日本における若者たちのコミュニケーション能力に関するこうした認識上のギャップをどのように理解したらよいのかという問題が浮かび上がってくるように思われる。
- (28) ジョン・H・カートライト『進化心理学入門』鈴木栄太郎・河野和明訳, 新曜社, 2005年, 91～92頁。
- (29) 同上, 92頁。
- (30) 山岸俊男『社会的ジレンマのしくみ—『自分1人ぐらの心理』の招くもの—』サイエンス社, 1998年(7刷), 51～54頁。
- (31) アダム・スミス, 前掲書『諸国民の富Ⅰ, Ⅱ』, 81頁。
- (32) ヘーゲル『法の哲学』岩崎武雄訳, 中央公論社, 1978年, 462頁。
- (33) アダム・スミス『諸国民の富(一)』大内兵衛・松川七郎訳, 岩波文庫, 1987年版, 118～119頁。
- (34) デイヴィット・ヒューム『人性論(三)』大槻春彦訳, 岩波文庫, 1995年版, 133頁。
- (35) ジョン・ロック『人間知性論』大槻春彦訳, 岩波文庫, 1997年版, 351頁。
- (36) ジョン・H・カートライト, 前掲書, 92頁。
- (37) ヴィンセント・ホープ「道徳哲学にたいするスコットランド人の貢献—人間の社会性とは何か—」(北爪真佐夫・内田司編著『生活の公共性化と地域社会再生』アーバンプロ出版, 2003年所収)を参照してほしい。

### The Sociology of Emotional Communication and the Modern Societies (3)

UCHIDA, Tsukasa

One of features of our life style in the modern societies is that we live in the way of life in which reason is dissociated from the emotional life and is contrasted with it. And we have also given a big importance on reason, but on the other hand we have neglected an important significance of the emotional life.

In modern market societies in which we have lived, we have had to adapt ourselves to the rationalized social life in which the principles of modern rational and economized social life, like maximal profit by minimal cost, optimization, efficiency, and possibility of calculation, have been supreme ones. In such economized way of social life in the market societies, we have to treat the world outside us and ourselves as a means and instrumentally with the emotion (account) of profit and loss to attain ourselves ends, whether we wanted to or not.

In such social life, we have seen only intelligence as reason, but in the other hand, we have made emotions belong to the second and subordinate place, by seeing them as disturbing our rational activities and being irrational things. However, such very social life style seems to have suppressed our emotional life and have raised a lot of emotional problems that we don't know how to solve, not only in our individual minds but also in our social world.

I am going to analysis social conditions and our social life style which have raised such emotional problems, from the point of view of emotional communication in a series of articles. In this article, I intend to treat the emotional communications based on sympathy and the emotion of profit and loss, and suspicious communication. I will treat emotional communication based on arrogance and resentment in the next article.

Key Words: emotional communication, sympathy, the emotion (or account) of profit and loss, suspicious communication, arrogance and resentment, love

(うちだ つかさ 本学人文学部教授 生活構造論専攻)